吉本隆明、ＮＨＫ出演その後
――自己表出の「沈黙」は唯物論的であることについて

吉本隆明のＥＴＶ特集出演、いやー、最初から最後までどきどきしながら見ていました。吉本は私の思想的なお父さんのようなものです（こんなことを告白するのはここが初めて）。彼の書くものは高校一年生（一九七〇年）の頃からずーっといままで読み続けてきました。

今日のＥＴＶを聞いていると、やはりこの人の思想のアルファにしてオメガは、『言語にとって美とはなにか』（一九六五年）の「自己表出」「指示表出」がすべてなんだなぁ、ということがよくわかります。共同幻想論も自己表出論なわけです。

「自分にしかわからない」と思わせたら一流

最近、この自己表出と指示表出との関係を吉本はもっとわかりやすい言い方で以下のように言っています。

> 文句なしにいい作品というのは、そこに表現されている心の動きや人間関係というのが、俺だけにしかわからない、と読者に思わせる作品です。この人の書く、こういうことは俺だけにしかわからない、と思わせたら、それは第一級の作家だと思います。（『真贋』講談社インターナショナル・二〇〇七年）

吉本がこんなにわかりやすく「自己表出」「指示表出」との関係を語ったのは、私の四〇年近い吉本読書歴の中で初めてのことです。早くそう言っておいてよ、という感じ。ここで「俺だけにしかわからない」というのが、自己表出性。しかし「俺だけにしかわからない」と誰もが思うわけですから、その「誰もが」思う表出性が指示表出性です。優れた作品（＝優れた表現）というのは、ディスコミュニケーションを共有するものなわけです。これが吉本の〈表出〉概念の根源です。〈表出〉の本質は、まずもって〈沈黙〉としての自己表出と「誰もが」の指示性との矛盾の内にあるのです。

『言語にとって美とはなにか』の〈自己表出〉は、「マチウ書試論」（一九五四年）の「関係の絶対性」を言い代えたものです。「関係の絶対性」は「自己表出」の「絶対性」のことを先行的に示していたわけです。関係の「客観性」と言わなかったのは、そう言ってしまえば「指示表出」性と何ら変わらなくなるからです。「関係の絶対性」は自己表出性の特異な地位を暗示していたということ。「自己表出」を、吉本は昔は「疎外」（初期マルクスの言葉）とも言っていたし、「逆立ち」とも言ってい

(C)ASHIDA Hironao 無断複製を禁じます

た。この日は自然の方から「変化させられている」という言い方もしていました。

> 人間の意志はなるほど、撰択する自由をもっている。撰択のなかに、自由の意識がよみがえるのを感ずることができる。この自由な撰択にかけられた人間の意志も、人間と人間との関係が強いる絶対性のまえでは、相対的なものにすぎない。（中略）人間は、狡猾に秩序をぬってあるきながら、革命思想を信ずることもできるし、貧困と不合理な立法を守ることを強いられながら、革命思想を嫌悪することも出来る。自由な意志は撰択するからだ。しかし、人間の情況を決定するのは関係の絶対性だけである。（「マチウ書試論」一九五四）

私が生まれた年に書かれた「マチウ書試論」（吉本三〇歳のときの作品）はいつ読んでもみずみずしい。吉本は、人間は選択をする前に選択を強いられていると言っている。「ルッター型」か、「トマスアキナス型」か、「フランシスコ型」かは、それ自体が「相対的な」差異にすぎない。

この「相対」性を「指示表出」と吉本は言い代えたのです。私の言い方で言えば、意味〈がある〉ということと意味〈を伝える〉ということとはまったく別のことだということ。あるいは両者はまったく区別できない、と言ってもよい。この矛盾が〈自己表出〉と〈指示表出〉との関係なのだ。

私には、吉本の「マチウ書試論」の〈関係の絶対性〉から〈自己表出〉〈指示表出〉へ至る過程は「選択の自由」の手前にもう一つの大きな〈自由〉があることを感じさせるに十分な思想だった。また

たその自由は徹底的に強いられているが故にこそ根底的な自由であることを感じさせるに十分な思想だったと思います。

〈表現〉は不可能なものに賭ける営み

私が「生の」吉本を見たのは、一九八七年（九月一二日一四時から九月一三日一四時）、東京・品川のウォーター・フロントにある寺田倉庫T三三号館四Fでのことでした。吉本隆明・三上治・中上健次三氏主催の『いま、吉本隆明二五時――二四時間連続講演と討論』のイベントに参加して以来のことだ。私はその意味では吉本の熱心な「ファン」ではない。もっと早くから吉本の講演に参加していた人は多かったろう。しかし、どんな人生の転機のときにも（大した転機など私にはないが）、吉本の「関係の絶対性」＝「自己表出」性の〈自由〉は、私にとって希望の原理だった。未だにそうです。

私の最初の吉本読書歴のほぼ三年後、柄谷行人の『マルクスその可能性の中心』（群像）の斬新なヴァレリー読解が私のこころを震撼させたが（二〇歳前）、その一五年後、柄谷は吉本の自己表出論を「ライプニッツ症候群」としての「内面」病として糾弾した。

確かに吉本の「疎外」や「逆立ち」はライプニッツの反映論と似ているように思えるが、しかし吉本の自己表出の本質論は存在論的な自由論としてのみ意味を持っている。「ライプニッツ症候群」と言うのなら、柄谷の「形式化の諸問題」の方が遥かに相対論だ。吉本の自己表出は、柄谷の指摘する

(C)ASHIDA Hironao 無断複製を禁じます

「内面」病とはまったく別物です。自己表出論は後の吉本の言葉で言えば、〈悲劇〉論とでも言うものです。

吉本には〈大衆の原像〉という概念？があります。たとえば、〈表現〉＝表出という次元に入ってしまったら、もうそれは〈部分〉であって、何もしていない人間（＝大衆の原像）の方が遥かに「大きい」という考え方です。「何もしていない」人間はなぜ表現過程に入るのか。それは、誰にも伝わらないであろう自分の気持ち（事実）を伝えたいと思う矛盾に発しています。

> 自分というのは、体験的に言えば、そのモチーフが決して人からわかられたり正解されたためしがない。人はしゃべることによっても行為することによっても了解不可能だ。しかし、理解せしめられたことはないということ、あるいは、それをもっと敷衍化して言えば、人間というのは他者というものを理解することができないのではないかという一種の不可能性の予感みたいなものをどこかでつき破りたい、どこかでそれを解消したいというモチーフがあって、それで書く人、読む人というのが文学に近づいていくんじゃないか。（「批評にとって作品とは何か」『海』一九八〇年七月号所収）

つまり〈表現〉＝表出＝文学というものは、不可能なものに賭ける営みなわけです。それを吉本は〈悲劇〉と呼んだ。この〈悲劇〉を読み解くことは、作者の〈内面〉に帰属するのではなくて、〈大衆の原像〉に帰属するわけです。吉本は〈大衆の原像〉を作者や言葉の〈帰属性〉とも後々言い代えています。

何への帰属か。それを吉本は、〈歴史性〉と言ったり、〈生活〉と言ったり、〈現実〉と言ったり、誤解されやすい言葉でここ数十年何度も言い換えています。そういったものが〈個〉としての〈作者〉の言葉に乗っかったときにこそその文学は普遍的だ（〈類〉的だ）というように吉本は考えた。誤解を恐れずに言えば、自己表出が「伝わる」というのは（これは矛盾です）、自己表出の〈類〉性が「伝わる」ということです（もっと矛盾です）。この矛盾が〈悲劇〉です。コミュニケーションの基盤は機能主義的ではなく、唯物論的なわけです。〈悲劇〉は初期マルクスに属しています。したがって、吉本の言う自己表出性は、柄谷の言うようにライプニッツや西田幾多郎的な「内面」の自己表出ではなくて、〈類〉の表出であって、それは小林秀雄的な「作品をだしにして自分を語る」こと（＝自意識のロマン主義）とも遥かに異なっている。

柄谷も蓮實も「お勉強好きの学生」

つまり、吉本の自己表出論の〈自己〉＝〈作者〉は、〈主観〉や〈主体〉なのではない。蓮實重彦は、吉本的な挙措、つまり作品の意味を作者に帰属させること、そしてまた帰属性という思考そのものを柄谷と同じように糾弾したが、これも間違い。

(C)ASHIDA Hironao 無断複製を禁じます